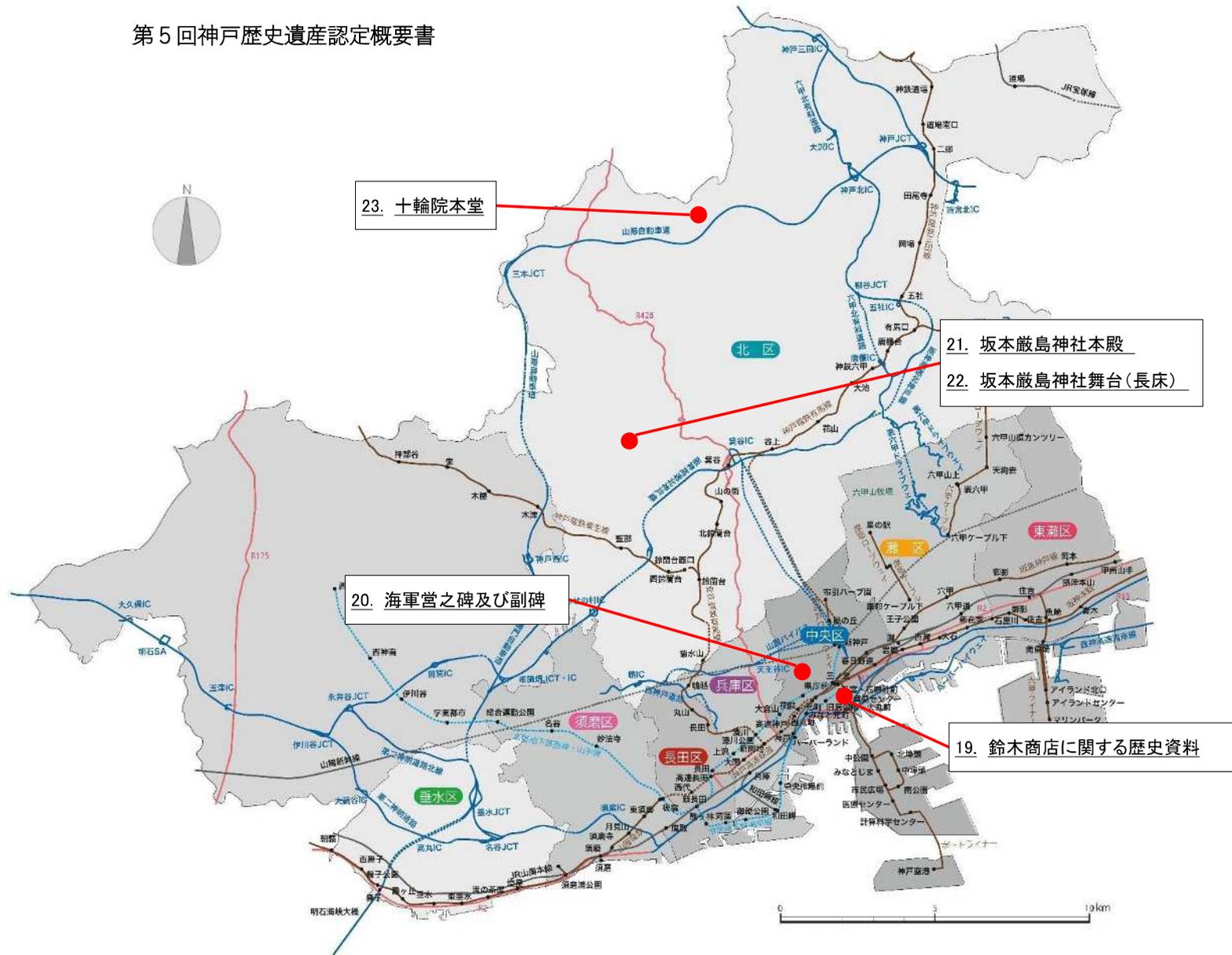


第5回神戸歴史遺産認定概要書



すずきしょうてん かん れきししりょう 鈴木商店に関する歴史資料

所在地：神戸市中央区京町 24 番地 神戸市立博物館（寄託先）及び
神戸市中央区磯辺通 1-1-39 太陽鋳工株式会社

員数：5点

（内訳）

天下三分の宣誓書 1通、船鉄交換契約記念置き時計 1点、暖簾 1枚、法被 2枚

所有者：太陽鋳工株式会社（法被1点を除き、4点は神戸市立博物館寄託）

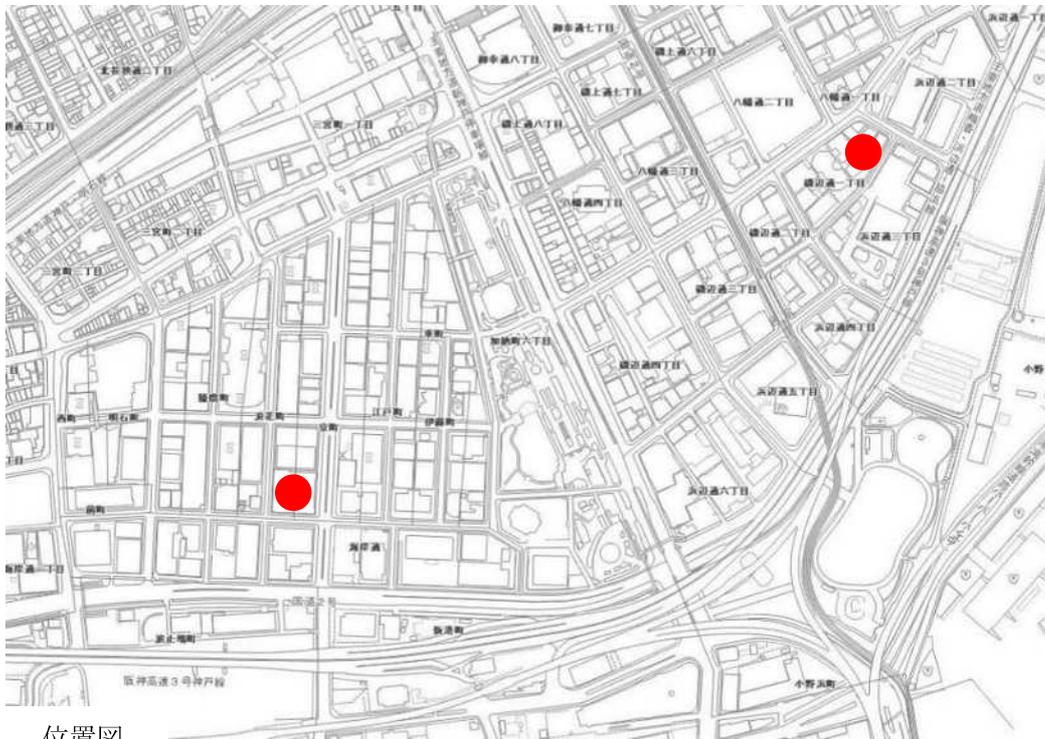
概要

鈴木商店は、1874(明治 7)年に洋糖引取商として辰巳屋(大坂の貿易問屋)から暖簾を譲り受け、神戸にて「神戸辰巳屋 鈴木商店」を創業したのがはじまりである。外国人居留地の商館と取引を行い、樟脳、砂糖、製糖、製鋼、ビール、海運、造船など製造業によって、神戸および神戸港の発展のみならず明治・大正期の産業革命を牽引した。大正時代には日本一の総合商社と称されるも、1927(昭和2)年の金融恐慌のあおりを受けて事業を停止する。ただ事業が多岐にわたったことから、現在の大企業は鈴木商店の流れを汲むものも多い。2014(平成 26)年には鈴木商店記念館(WEB サイト上の記念館)を開設し、明治から大正にかけて神戸港の繁栄の一端を担った鈴木商店の顕彰活動をすすめている。

申請の資料は、鈴木商店関係者の家に伝わった計5点で、大番頭金子直吉がロンドン駐在の部下に送った直筆の書簡「天下三分の宣誓書」をはじめ、金子直吉の働きにより成立した日米船鉄交換契約を記念して贈られた置き時計、また当時の鈴木商店とその関連会社で使われていた法被2枚と暖簾1枚である。所有者太陽鋳工株式会社は鈴木商店のソーダ工業部門の流れを汲む企業である。法被 1 点はこの企業で保管されており、これを除く他の物件は 1978(昭和 53)年、神戸市立博物館に寄託され、折に触れ公開されている。

評価

神戸港の貿易に携わった商社のうち、戦前、大きな影響力のあった鈴木商店に残されてきた本資料群は、今日の神戸を語る上で象徴的な資料といえる。所有者と関連企業および鈴木商店記念館は鈴木商店に関する講談会を開催するなど、積極的に当資料について顕彰活動をしていることから神戸歴史遺産としてふさわしいと考える



位置図



天下三分の宣誓書（神戸市立博物館寄託品）

幅 18.5 cm 長さ 618.4 cm 中国の歴史書「三国志」の”天下三分の計”の故事に倣い天下覇権を目指す金子直吉が大正 4(1915)年 11 月 1 日、ロンドン出張所長・高畑誠一ほか 2 名に宛てた書簡



船鉄交換契約記念置き時計（神戸市立博物館寄託品）

大正 7(1918)年、米国と日本の造船各社との間で“日米船鉄交換契約”が締結された記念に、米国船舶局横浜出張所代表のマグレガーおよびラッケンバッハ両氏名にて米国ネグス社製海洋置き時計が贈呈された。



暖簾（神戸市立博物館寄託品）

縦 137.6 cm、横 120.3 cm

鈴木商店創業期由来の「辰」暖簾

明治 35(1902)年、個人商店から合名会社に改組するも、個人創業期から引き継がれた辰巳屋の暖簾。



法被 (神戸市立博物館寄託品)

縦 100.5 cm、横 116.5 cm

背面に「辰」文字あり



法被 (太陽鋳工株式会社保管品)

縦 84.5 cm、横 121.3 cm

各社の役員が台湾時代(大正期)に使用していた鈴木商店の法被。

かいぐんえいのひ 海軍營之碑 及び ふくひ 副碑

所在地：神戸市中央区 諏訪山町1番地(諏訪山公園内)

員数：2基 内訳:海軍營之碑 1基 副碑1基

所有者：神戸市

管理者：神戸諏訪山ふれあいのまちづくり協議会

概要

海軍營之碑

神戸海軍操練所は勝海舟の建議により、1864(元治元)年5月、生田川河口付近の小野浜に開設された。勝は同年10月、我が国の海軍創設の地としての記憶を留めておくために、自ら撰文して設置した石碑が「海軍營之碑」である。しかし、同年11月、禁門の変への神戸塾(勝の私塾)生の関与により軍艦奉行職を解かれ、同時に神戸海軍操練所は閉鎖された。この時、勝はこの碑を勝の支援者だった神戸村庄屋生島四郎太夫に託し、生島は自身の奥平野村の別邸(現在の兵庫区五宮町)にて保管していた。1882(明治15)年には、側面に神戸在住で勝の旧知である旧福井藩士本多敬義の碑文が追刻された(この碑文は現在見るできない)。その後、この碑は生島氏から神戸区(現神戸市)に寄贈され、1915(大正4)年11月、諏訪山金星台(現諏訪山公園)に移建された。その際元の碑を、花崗岩の大石に嵌め込み、徳川家達による篆額「海軍營之碑」が施された。また裏面には旧福井藩主松平慶永(春嶽)の和歌が追刻された。なお、近年新たに花崗岩板(黒御影石)で同一文を作成し旧碑面は覆われている。

現在の寸法概数 高 2,300mm. 幅 2,000mm. 厚 600mm(灘区篠原産花崗岩製)

元の碑寸法概数 高 1,200mm. 幅 800mm. 厚 600mm (和泉砂岩製)

副碑

大正4年上記碑移建の際、男爵 目賀田種太郎(勝海舟三女逸子の夫)撰文の副碑(花崗岩製)も建立した。これには当時の勝海舟の心情、時代背景、生島四郎太夫のことを詳記している。

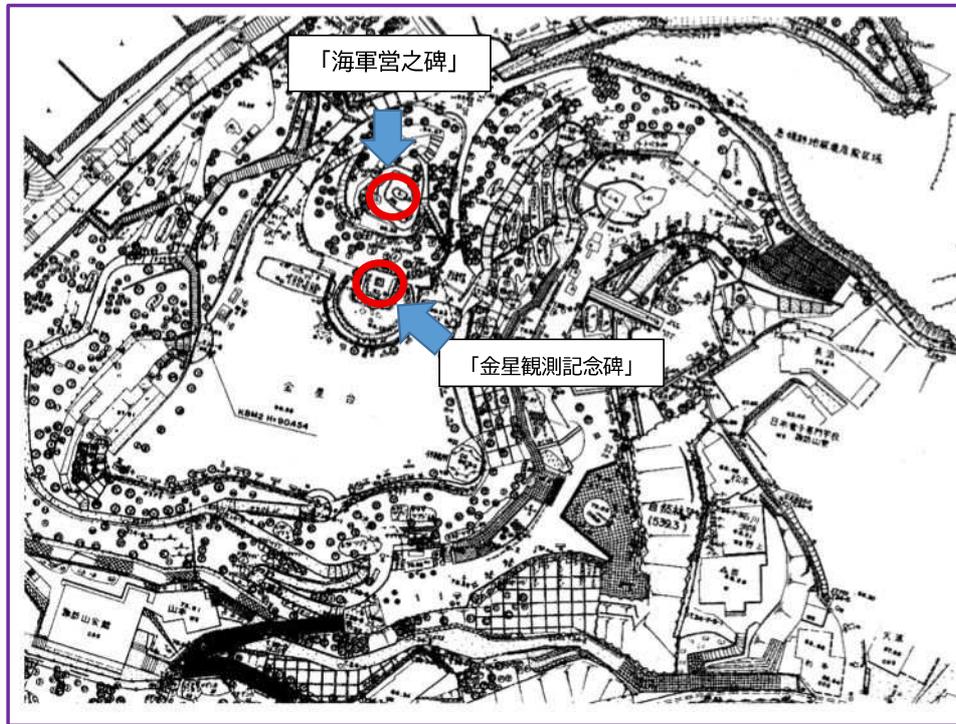
寸法概数 高 1,800mm. 幅 1,000mm. 厚 600mm (花崗岩製)

評価

神戸港の礎となった神戸海軍操練所の創設者である勝海舟が建設した当碑は、神戸の歴史の1ページを語るにふさわしい歴史遺産である。管理者である「神戸諏訪山ふれあいのまちづくり協議会」は同じ諏訪山公園内の、神戸歴史遺産「金星観測記念碑」についての解説会や地元小学生の地域学習等での説明をおこなっており、今後は「海軍營の碑」も同様の活動が期待される。



位置図



諏訪山公園内の位置図

海軍營之碑 碑文

文久三年歲次癸亥四月二十三日
大君駕火輪船巡覽攝播海濱 至于神戸 相其
地形命臣義邦 使作海軍營之基夫吾
邦方今急務莫急于海軍將以此營為始
英旨振起士風實在于是可謂當時偉圖而
千載之鴻基也願
大君踞床指畫之處恐其久而湮沒也臣義邦
謹勒干石以貽永世云
元治元年歲次甲子冬十月八日
軍艦奉行安房守勝物部義邦撰

読み下し文

文久三年、歲次癸亥四月二十三日、
大君、火輪船に駕し、攝播の海濱を巡覽し、神戸に至る。其の
地形を相し、臣義邦に命じて海軍營の基を作らしむ。夫れ吾が
邦方今の急務は海軍に急まるは莫し。將に此の營を以て始めと為す、
英旨の士風を振起しすること、實に是に在り。當時の偉圖にして、
千載の鴻基と謂ふべきなり。
大君踞床指畫の處を願みれば、恐らくは久しくして湮沒せん恐るるなり。臣義邦、
謹みて石に勒み、以て永世に貽さんと云う。

元治元年、歲次甲子冬十月八日。

軍艦奉行 安房守 勝物部義邦 撰。

海軍營之所碑 裏面 碑陰文

そのかみ神戸の港に勝大人の立てられし
碑の有るか無か文の埋もれしをこたひ
生島氏の庭に移されしと聞いて讀める
君なくは世に遠永く石ふみの
ときは(登幾半)常盤に残さらめや
源慶永

読み下し文

未だ立つこと能はずして、能く行ふ者有らざるなり。何ぞや。不敗の地に立つを立つとす。苟もその立つ所を得ざれば、行くに、

將に虎の尾を履むの懼れ有らん。曩の時、勝安房神戸港に碑を立つ。此に見ゆるか。碑今や廢して

凡そ石と伍にす。港の遺老、生島四郎、碑を修めて成す。

記す。余、嘗て

房州の者を知る。因りて即ちその由を識る。

明治十五年五月 本多敬義

未有不能立而能行者也 何乎 立不败之地苟
未得其立所而行
將有履虎尾之懼 曩時勝安房立碑神戸港見於
此乎 碑今廢而與
凡石伍港之遺老生島四郎修碑而成記余嘗知
房州者、因即識
其由
明治十五年五月 本多敬義

文久初年 世局將一變也 勝海舟翁力陳將軍親侍於 天朝之爲大
義 既而方其入觀 有英佛水軍寇手大阪之警 海內鼎沸 三年四
月廿一日將軍次大阪前日 大詔降矣 以五月十日爲攘夷期 將軍
駕順動丸至神戸 下定營地于安永新
田 廿五日 翁候姉小路公知少將于西本願寺 具陳欲完國防不有
優於海軍者 朝臣聽之 率百廿餘人又自順動丸至兵庫翁覆進前
陪從多 贊焉 五月九日 朝旨使各大藩任大阪南海堺浦之鎮護 又
命海營製鐵廠之建設 是實係朝臣
獻贊也 無奈群小勾舌 廿日朝臣俄遭害 翁慨慟 會過諏訪山下
逢生島四郎太夫 託以海營建設事 氏性俠 一諾自進督役 營成
矣 俊髦成群 中有阪本龍馬 請賞貴於越前慶永卿 益牢基礎 又
以足爲西海鎮府 請朝廷任命總督 翁又建策加設營于對馬朝鮮
以統制 皇國海軍 欲遠及清韓有連盟 無幾 甲子之變 長人竹田
庸二郎潛其舍翁說之 使停毛
利公嗣之入洛 事雖出至誠 猜忌交至 有司欲擬刑 營乃歸廢絕
碑亦墳墓埋沒 生島氏有所憚 匿于家久之先此 氏經紀外
人居留地也 攘夷派憎而拘禁 又沒其產 氏不屈 具嘗辛楚 奉公
倍舊 既而翁亦白干官 使其家道復舊云 後嗣四郎左衛門 深贊
贊 今回之舉適于時宜 乃出家之所 且諾其移建 可謂成先人
之志者哉 嗚呼此一片石 可以記文元之往時 又可以徵 帝國之
將來 豈翅尋常口碑而已哉。
大正四年十一月

男爵 目賀田種太郎 謹撰

読み下し文

文久初年、世局まさに一変せんとす。

勝海舟翁、力めて陳ず。將軍、親しく天朝に侍するを以て大義と為すべしと。

既にして、その觀に入るに方り、英・仏の水軍、大阪を寇するの警あり、海内鼎沸す。

三年四月二十一日、將軍大阪に次す。前日、大詔降る。五月十日を以て攘夷の期と為す。

將軍、順動丸に駕して神戸に至り、安永新田において營地を定む。二十五日、翁、西本願寺にて姉小路公知少將を候い、具に陳ず。国防を完うするには、海軍に優るものなしと。

朝臣これを聴き、百二十余人を率いてまた順動丸より兵庫に至る。翁、前言を覆して進め、陪從多くこれを賛す。五月九日、朝旨ありて、各大藩をして大阪・南海・堺浦の鎮護を任せしむ。また海軍製鉄所の建設を命ず。これ美に朝臣の献策に係るものなり。

奈何せん、群小舌を弄し、二十日、朝臣俄かに害に遭う。翁、慨慟す。

会諏訪山の下を過ぎて、生島四郎太夫に逢う。これに海軍建設の事を託す。

氏、性侠にして、一諾して自ら督役に進み、營成る。俊鬚群を成し、中に阪本龍馬あり。賞を貴く越前の慶永卿に請い、磐牢として基礎を築く。また足を以て西海鎮府と為し、朝廷に請うて総督を任せしめんとす。翁また策を建て、対馬・朝鮮に營を加設して皇國海軍を統制し、遠

く清韓に及びて連盟あらんことを欲す。幾ならずして、甲子の変あり。長人竹田庸二郎、その舎に潜みて翁にこれを説き、

毛利公嗣の入洛を停めしむ。事、至誠に出づと雖も、猜忌交至り、有司、刑に擬せんと欲す。營、乃ち廢絶に帰し、碑もまた墳墓に埋没す。

生島氏、憚るところ有りて、これを家に匿す。久しく此に先んず。氏、外人居留地を經紀す。

攘夷派これを憎みて拘禁し、またその産を没す。氏、屈せず、辛楚を嘗め、公に奉ずること旧に倍す。

既にして翁また白して官を去り、その家道を復旧せしむと云う。

後嗣四郎左衛門、深くこれを賛し、今回の拳、時宜に適うと為す。乃ち家の匿せしところを出し、且つその移建を諾う。これを以て先人の志を成す者と謂うべきか。

嗚呼、此の一片の石、以て文久の往時を記すべく、また以て帝國の将来を徴すべし。

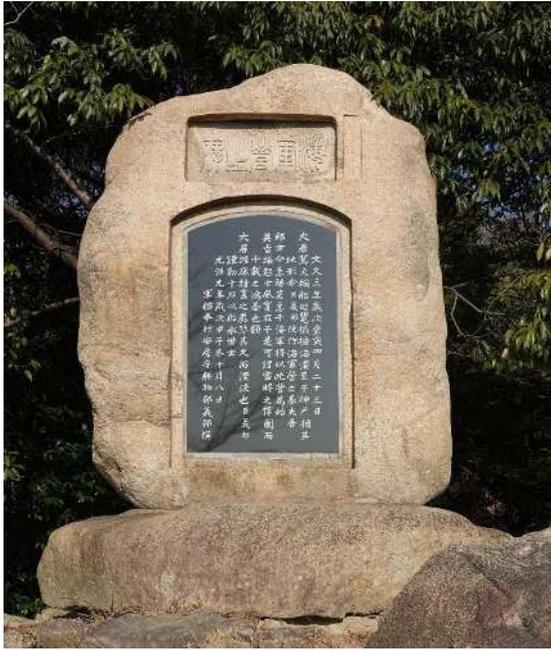
豈尋常の口碑のみならんや。



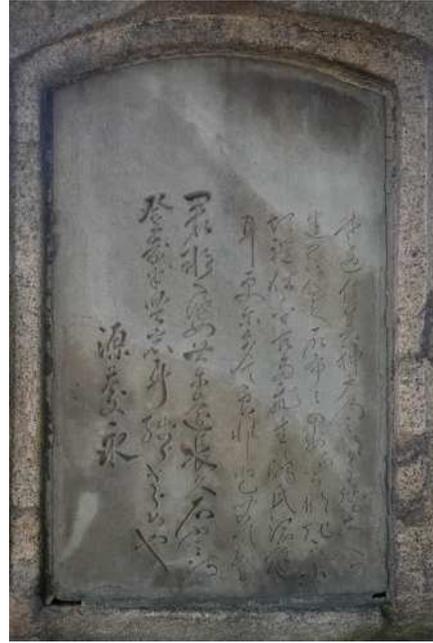
現況（遠景 手前の円柱は金星観測記念碑）



現況（近景 右 「海軍營之碑」 左「副碑」）



「海軍營之碑」表面



「海軍營之碑」裏面



「副碑」表面

さかもといつくしまじんじゃ ほんでん
坂本 巖 島神社 本殿

所在地 : 神戸市北区山田町坂本字後阪

員数 : 1 棟

所有者等 : 所有者) 宗教法人巖島神社
管理者) 坂本自治会

概要

巖島神社の創建時期は不詳であるが、丹生山水系を守護するために祀られたという。当初は丹生山への参詣道沿いに位置していたが、土砂崩れにより参道が変わったことにより、現在の参道からは離れた場所に位置する。1873（明治6）年には村社に列せられている。

当建物は東西10m、南北8.4mの、一間社柿葺き春日造である。現在は覆屋に収められており保存状態は良好である。後補のものも確認できるが、木鼻など細部に装飾的な意匠が見られる。前面にはかつて拝殿があったが、1912（明治45）年6月の倒木により倒壊した。また本殿の背後にかつては山側から水が流れ落ちていたと伝わる小池があり、山崖の中ほどには四角に穿孔した穴に水神祠を祀る。本殿から見て池の右手前には寄せ集めの石塔（室町時代）があり、その傍らには荒神社がある。

以前は神社に対峙する回り舞台を備えた舞台があったが、1918・1919（大正7・8）年頃に解体され廃絶した。現在はその跡に長床が建てられている。

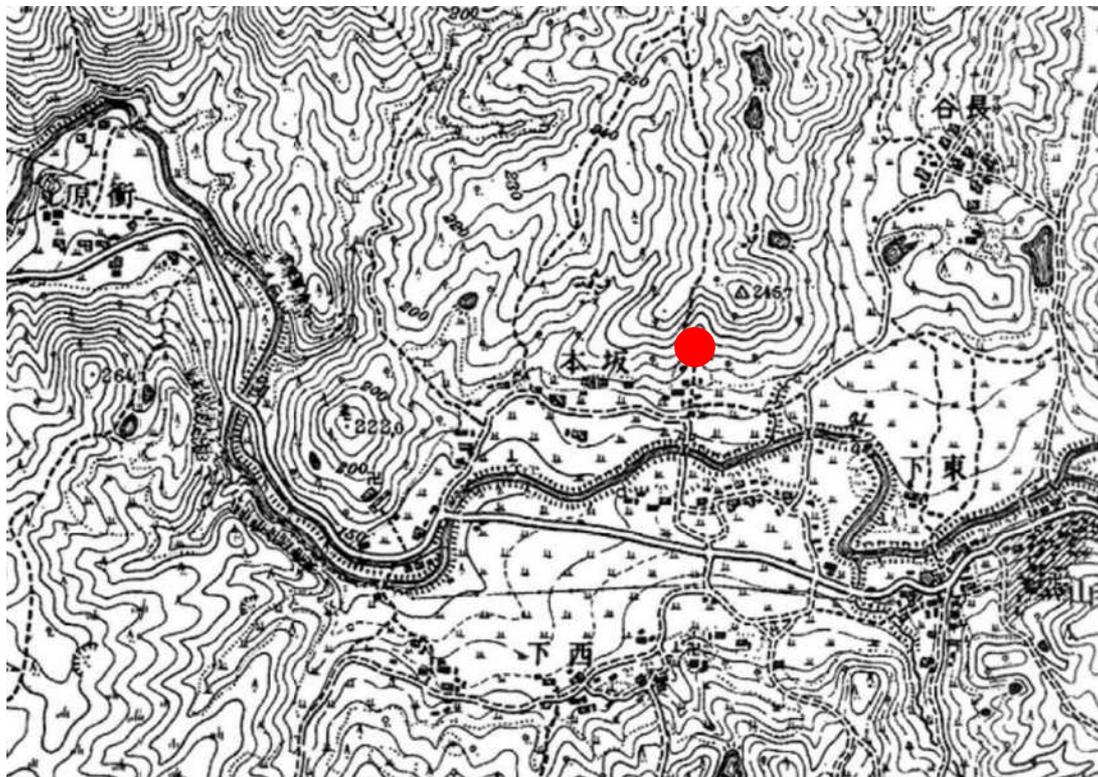
なお、境内には、明和7（1770）年銘の鳥居と灯籠がある。

評価

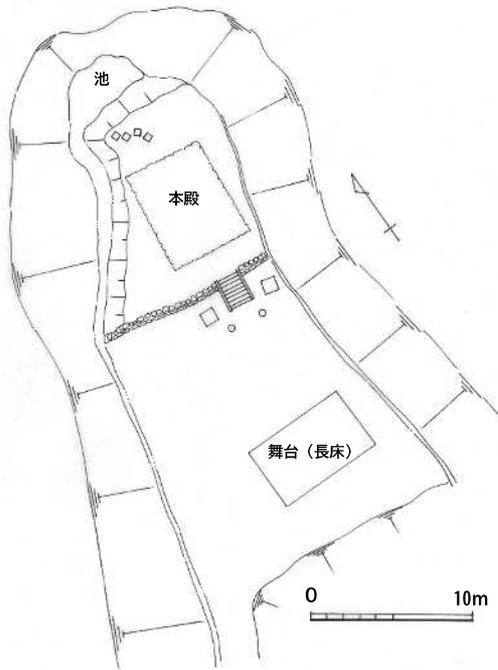
巖島神社本殿の建築時期は不詳であるが、鳥居の刻銘が明和7（1770）年とあることからこの時期の築造と推測される。拝殿は、1912（明治45）年に倒壊しているが、その後も地元によりお祀りが行われている。現在当本殿は宗教法人巖島神社の所有にはなっているが、古来、地域住民の手で守られてきたものである。地域活動を通じてコミュニティを形成する場所として、また坂本地区のシンボルとして将来に語り継いでいくとのことは、神戸歴史遺産としてふさわしいと考えられる。



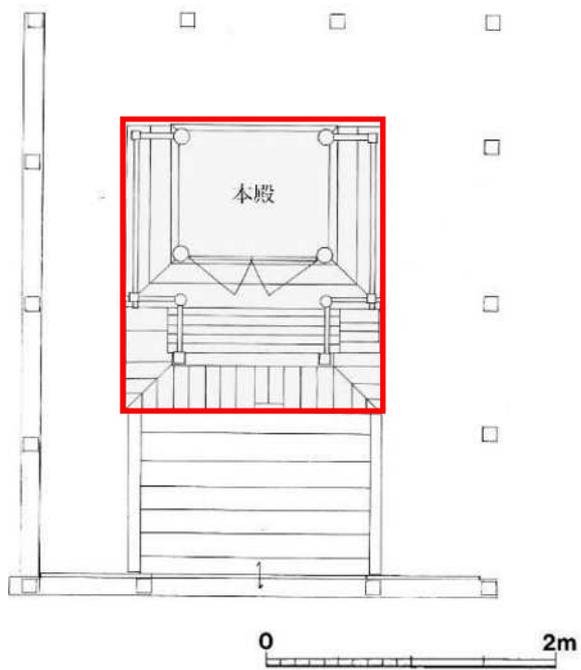
巖島神社・舞台 位置図



位置図 (明治 30 年代)



厳島神社 境内配置図



厳島神社 本殿

凡例 赤線内が認定範囲



巖島神社・本殿



本殿



本殿正面上部



本殿背後の小池と水神祠、石塔（室町時代）、荒神社

さかもといつくしまじんじゃ ぶたい ながとこ
坂本 巖 島神社 舞台 (長床)

所在地 : 神戸市北区山田町坂本字後阪

員数 : 1 棟

所有者等 : 坂本自治会

概要

巖島神社の創建時期は不詳であるが、丹生山水系を守護するために祀られたという。当初は丹生山への参詣道沿いに位置していたが、土砂崩れにより参道が変わったことにより、現在の参道からは離れた場所に位置する。

神社の本殿は東西 10m、南北 8.4m の、一間社柿葺き春日造で、現在は覆屋に収められている。その前面にはかつて拝殿があったが、1912 (明治 45) 年 6 月の倒木により倒壊した。

この倒壊した拝殿と同一建物か別建物だったのかは不明だが、以前は神社に対峙して回り舞台を備えた舞台があり、記録によると明治 30 年代までは芝居興行が行われていた。1915 (大正 4) 年にはこの舞台を長床に改築し、拝殿として使用されたとのことから、倒壊した拝殿は別建物で、その代替として舞台を長床に改築した可能性がある。しかし、この長床も 1918・1919 (大正 7・8) 年頃には解体され廃絶した。地元の話によると、現在の舞台 (長床) はその跡に大正年間に建てられたものとのことである。

当舞台 (長床) は東西 6 間半 (6.6m)、南北 3 間 (4.1m) の東西方向に棟を持つ建物で、屋根の形状は、西側は入母屋造り、東側は切妻造り瓦葺である。東西両面と南面の壁は板壁で塞ぎ、本殿側を向く北面は解放となっている。この北面は両端から約 1m に鏡柱を立て、その間に虹梁を架し、その間には柱を置かない舞台様の構造となっている。

なお、当初は両妻側とも入母屋造りであったものが現在の形に改造された可能性もある。

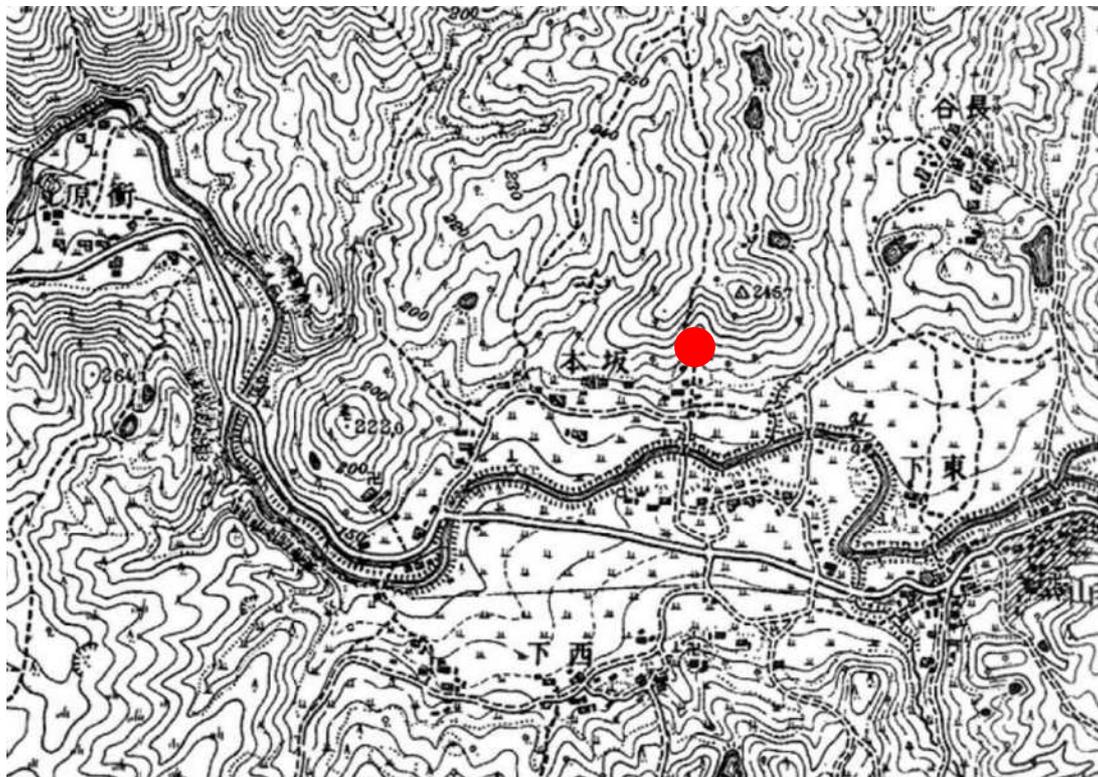
評価

巖島神社本殿の建築時期は不詳で、鳥居の刻銘が明和 7 (1770) 年とあることからこの時期の築造と推測される。現在、土地と本殿は宗教法人巖島神社の所有にはなっているが、地域住民の手によって守られてきたものである。

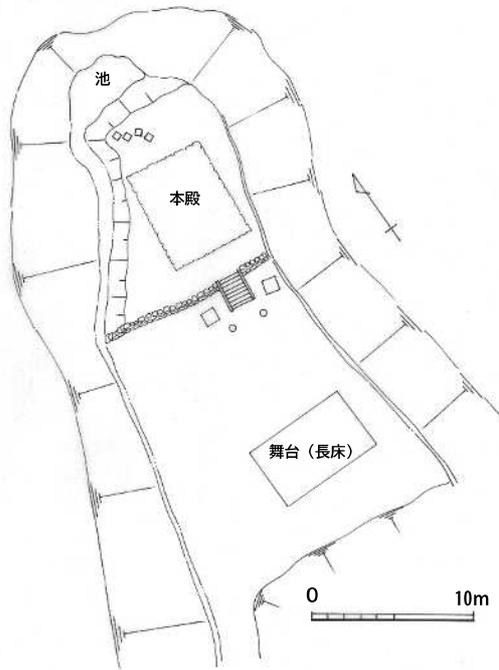
神社本殿に対峙する舞台 (長床) は、かつては舞台として利用されていたようである。村の記録によると、この舞台で農村歌舞伎が行われていた可能性がある。大正年間に再建された現在の舞台 (長床) は、地域住民の輪番で清掃が行われ、また催しになどに使われている。地元では地域活動を通じてコミュニティを形成する場所として、また坂本地区のシンボルとして将来に語り継いでいくとのことであり、神戸歴史遺産としてふさわしいと考えられる。



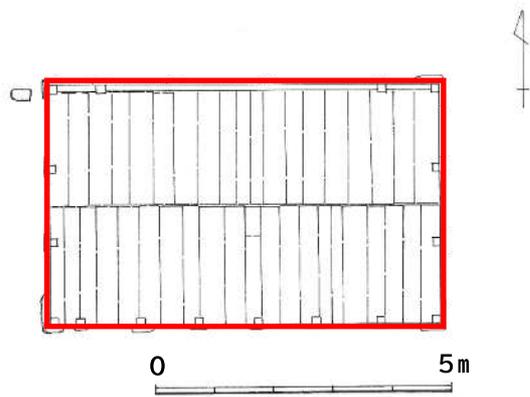
巖島神社・舞台 位置図



位置図（明治30年代）
 （丹生山への参道がかつては巖島神社の横を通っていたことがわかる）



厳島神社 境内配置図



厳島神社 舞台(長床)

凡例 赤線内が認定範囲



舞台（長床）北側



舞台（長床）西側



上部の梁（東側）



西側の板壁

じゅうりんいんほんどう
十輪院本堂

所在地：神戸市北区淡河町神影 76

員数：1棟

所有者等：宗教法人十輪院

概要

十輪院は北区淡河町神影所在の石峯寺の塔頭寺院である。石峯寺には往時 72 の塔頭があったと伝わり、十輪院はその参道に面して並んでいた塔頭の一つである。江戸時代、石峯寺には明石藩主が度々来訪したと伝わり、1819(文政2)年の文書には藩主巡見の際に十輪院にて休息したとの記録がある(※1)。なお、十輪院敷地全体は文化環境保存区域「石峯寺及びその周辺」の指定区域内にあたり、門と土塀は歴史的建造物に選定されている。また、庭園は、江戸時代前期の作庭とされ、神戸市指定名勝(庭園)の第一号に指定されている。(※2)

本堂は桁行 20.8m、張間 9.4mを測る平入の入母屋造である。屋根は茅葺で昭和40年代に、トタンが被せられている。平面形は六間取りの方丈に、角屋を北側に接続した形態で、外観・構造ともに周辺の農家に近い。南面の4室と、仏間、座敷背面の部屋には長押を回す。一部に改造がみられるものの、当初の形態がよく残っている。小屋組はオダチトリイ組で、棟通りに7本のオダチを立て、その両側 2.5mほどの位置に控えの束を立てて、母屋桁を載せ、垂木を架ける。

棟札は見つかっていないが、形態により 19 世紀中期頃の建築と考えられる。

近年は近隣住民の憩いや親睦の場として活用され、建物内部は折に触れ見学できる機会を設けている。

評価

十輪院本堂は部分的な改造がみられるものの、間取りの改変はなく、江戸時代の建築物としてほぼ創建当時の姿が残っている。

地域の手により遺されてきたこの建物は、今後も地域によって保存・活用されることも考えられており、神戸歴史遺産としてふさわしいと考えられる。

参考 ※1 下田勉氏所蔵文書「御巡見村々覚」 ※2 『平成9年度神戸市指定文化財調査報告書』

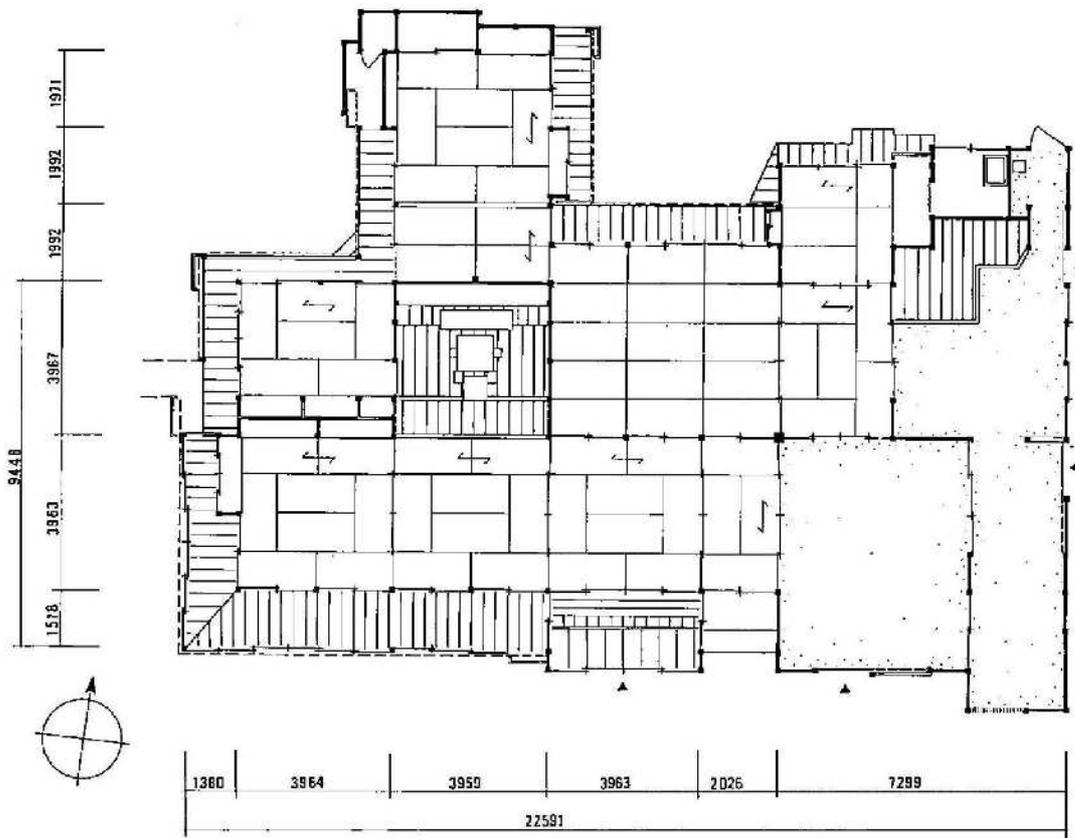


位置図



十輪院配置図

凡例 赤トーン部分：認定範囲



平面图



断面图



十輪院本堂（南東から）



十輪院本堂（南西から）



小屋組（東から）



小屋組（西から）



小屋組柱の手斧痕跡



外陣側室内（東か



周辺状況（手前 十輪院、奥 竹林寺）